

未来のノート

私は、母のことを知らない。人柄はどうだったのか、何が好き・苦手だったのか、口癖は何だったのか。何一つ知らなかった。

私が2歳のころ、母は、病気によってこの世から旅立った。何が起きたかもわからなかった私を、父は葬儀後、祖父母がいる愛媛に連れて帰ってきた。しばらくは父の兄弟も祖父母の家に来て、私の世話をしてくれた。保育園に入ってしばらくして、私を毎日送り迎えしてくれるのが祖父母と父であり、周りは母親が送り迎えをしていることに疑問を感じ始めた。ある日私は、父や祖父母に「なんで周りはお母さんが迎えに来ているの？」と質問をした。父は「アイス買いに行こうか。」とごまかした。今思えば、父に申し訳ないことを言ってしまった。私が6歳になったころ、父は母がこの世を去っているんだと話してくれた。本当は自分自身でもどこかで分かっていたけれど、いないと聞いたときは泣き叫んでいた。中学生になったころ、私は部活動の人間関係で悩むことが増えた。精神的に限界になったとき、父がドライブに連れて行ってくれた。父は車の中で「逃げたいときは逃げてもいい。だけど自分にとって後悔が残るなら戻ればいい。」と言った。そして、この言葉は、父が仕事や人間関係で悩んでいるとき、いつも母が言ってくれたのだと話してくれた。私はこの言葉をきっかけに、もう一度頑張ってみようと思った。高校生になったある日、父と倉庫の整理をしていた私は、ある段ボール箱を見つけた。中には、私の幼かったころの写真と、何冊もの成長日記が入っていた。ページをめくると、母の字で、私ができるようになったことや嬉しかったことが書かれていた。あるページで私の目は止まった。そのページには、「優しく、誰にでも愛される存在になってほしい」と書かれていた。

母は亡くなるまで、私のことを愛情いっぱい大切に育ててくれた。私はそのことを知り、どんなに時間が過ぎようが、母は私にとって唯一無二の存在だと思った。